

日本看護歴史学会

會報

日本看護歴史学会
第 21 号
1995年5月15日

戦後50年にも思うこと

G H Q の看護指導の体験記

五十嵐 節

昭和20年12月、東京都新宿区戸山町にある旧陸軍病院の中に国立東京第一病院（以下東一という。現在の国立病院医療センター）ができた。ここでは、昭和23年よりGHQ（連合軍総司令部）の指導による看護の再教育が実施されていた。私は昭和25年から32年まで約八年間を勤務した。就職面接時に初めてお会いしたのが、当時まだ若い吉田浪子総婦長であった。

戦後いち早く東一はGHQによりモデル病院とされ、看護の知識・技術・管理の再教育を徹底的に実施していたと思う。看護部の構成は、年功序列ではなく、25歳の病棟婦長の下に40代・50代のスタッフナースがいたり、戦勝者GHQでなくては最も上下のきびしい軍病院で考えられない人事や管理が

どんどんと進んで行われていた。看護の指導は、ミス・カルソンとハーターの名前を記憶している。最高指導者として、女医マニトフがいた。彼女は時どきやってきた（記録あり）。ある時は、病院職員を一堂に集め一喝して看護を中

心とした組織のあり方を話した。とくに看護婦の役割に関して、医師に隷属している看護をみて具体的に看護とはを説いた。今でも、一言一句が記憶にとどまっているほど鮮烈であった。私たちは「マニトフ旋風」としておそれたが、今にして思えば当然のことだ。看護の本質を説いていたと思う。当時「婦長・看護婦・医者・小使い・モルモット・インターン」ということを耳にしたことがあるが、こんな皮肉を言われる程いかに看護

を中心とした患者のケアを問われたかを物語っている。

東一での再教育は、直接、外国人ナースから、または、22年に、保助看法で発足した新年度の看護学院の先生たちの指導も受けた。私はこの8年間に三カ月の指導者講習、一カ月の解剖学の教育（女子医大解剖学教室）をうけ、更に、28年には米軍49病院に二カ月派遣された。現在の築地のガンセンター、戦時中は海軍病院であったとき。そこで学生さんと呼ばれて検温、ベッドメイキング、臥床患者の全身清拭、背部清拭、マッサージをさせられた。当時、朝鮮戦争たけなわで主に戦傷者だったが治療の介助は見たこともなかった。

管理体制は非常に合理的で看護ケアをするにも物資が豊富ばかりでなく清潔さ、整理は抜群としか言いようがなかった。すべてが患者のためを考えられていた。ケアに関しては、ベッドメイキングの仕方ひとつでも少しでも「しわ」がよっていると作り直しなさい、と呼ばれる。シーツはいつもピンと張っていなければならなかった。褥瘡予防は非常に神経を使っていたと思われた。看護の役割については、自信とほこりをもって徹底していた。それだけに、たかがシ

ーツの小じわではなく、極めて重要なチェック項目なのである。

当時の日本の病院では、完全看護・完全寝具と言っていた頃であったが、シーツに関してはマットレスを包みこむだけの広さがなく朝のベッド整頓に行くと、シーツは脇が外れて背中丸まったりしているという状況もあったことも覚えていた。

また、食糧もままならぬ日本と比べて、当時、紙パックの一人用の牛乳が配られていた。ちょうど今の満ちたりた日本と変わりがなかったのである。このアメリカの豊かさを見たとき、敗戦日本のやむなきを痛い程感じたものだった。

あれから50年、アメリカは戦後すぐに看護の大学教育化がはじまった。日本では昭和27年から約40年で僅か10校しかできなかった大学が平成元年より40校にもものぼり破竹の勢いで上昇しつつある。医療も変化し複雑となっていくなかで患者の幸せを奪わない看護を目指して行きたいものである。アメリカが歴史をふまえて長年培ってきた看護を日本では出来上りを重宝に使うてしまう傾向がある。

戦後50年、看護の行方を誤またぬよう、歴史からしっかり学んでいきたいと願っている。

第九回日本看護歴史学会開催案内

メインテーマ「戦後五〇年看護改革の行方」

本会々報第二〇号で御案内しました通り、今大会は戦後五〇年に照準を合わせ、日本の看護に一大転期をもたらすことになったGHQ（連合軍総司令部）の看護改革に直接関与された方々をお招きしました。

看護職必聞・必見の時代の貴重な証言を得ることは、今後の看護改革にも大きな示唆となるのではないのでしょうか。会員・非会員を問わず、多くの方々の御参加を心より願う次第です。

◆開催日程

八月五日（土）午後一時開場
八月六日（日）午前九時開場

◆会場

京都市女性総合センター「ウィングス・京都」二階・イベントホール（二八〇名収容）
604京都市中京区東洞院六角下ル御射山町二六二

〇七五―二二二―七四七〇

◆第一日目 午後一時受付開始
午後一時半 開会

◆メイン行事

「私のかかわった戦後の看護改革」
コーディネーター 草刈淳子氏

午後一時三十分～二時三十分

講演 金子光氏

昭和一六年 厚生省人口局総務課厚生技官として入局

昭和二〇年 厚生省公衆保健局保健所課技官として保健婦問題に取り組む

昭和二五年 厚生省看護課長

午後二時三十分～三時三十分

講演 大森文子氏

昭和一七年 軍事保護院技手同院医療課勤務等

昭和二〇年 厚生省医療局（後の医務局）厚生技官

昭和四八年 看護課設置に伴い同課に配転

午後三時四十分～四時半

参加者との質疑応答

午後四時三〇分
会員総会

午後五時 閉会

◆第二日目 午前九時受付開始

午前九時半

会員による研究発表

座長 依田和美氏

午前十時（研究発表者の人数により、若干の変更あり）

担当 五十嵐節氏・高田節子氏

午後一二時半～一時半

昼食会を兼ねた懇親会（千円）

午後二時

シンポジウム

「私のかかわった地方の看護改革」
コーディネーター 五十嵐節氏
田中幸子氏

埼玉県

新井サダ氏

元大宮赤十字病院総婦長

京都府

岡部登美子氏

元京都府勤務

福井県

高岡スミ子氏

元福井県立病院総婦長

午後四時 閉会

総合同会

武藤美和氏

◆大会参加費

会員 三千元

非会員 四千元

学生（院生を含む） 二千元

◆参加申し込み方法

同封の振込み用紙に、参加者名（複数連名可）、参加費および懇親会参加の有無を明記し、来る七月一〇日までに振込みをして下さい。

◆研究発表の申込みについて

研究発表を希望する方は、「研究発表希望」と朱書きで、テーマと内容の概説を付し、六月十五日必着で左記へ郵送して下さい。

583羽曳野市はびきの三―七―三〇

大阪府立看護大学医療技術短期

大学部 依田和美氏宛

◆会場までの見取図は四頁参照。

